1889
日清
滑稽
まやりた
大博覽
會

ペキンと
宋を日本と

特64
383

序

序文畢竟刺身のツマ。必ずしも匆卒の作だからなど斷らずとも。唯夫れ卷頭空地の存するまゝ、戯に新占領地の四季を詠じて、序に代へ、餘白を塡むと爾。

石街道人、みさを記

滿州の四季

安東の春

白妙に積る恨も皇國の　春の惠みに雪とけて
乙女童はそでつらね　若菜つむとて忙がしや。

摩天の夏

山又山の重なれば　つねに夕の心地して
谿又谿の響くれば　こゝには夏のおとづれぞ。

旅順の秋

畳はかれて風さむみ　森の梢のねぐらには
鳥の夢や破れけん　聲するかたに月白し。

金州の冬

我皇軍に打まけし　かたみの爲の白旗か
むかしのさまの忍ばるゝ　城の櫓に雪ぞちる。

日清滑稽流行歌 大博覽會目次

◉三番叟
◉お座附
◉日清替唄
○君が代○梅にも春○秋の夜○行くれて○我もの○雪は巴○淺くとも○かれ細る○一人寐○夕ぐれ○一夜あくれば○けさ結し○明暮に○色がある○松づくし○十日戎○おとし文
●滑稽奇話＝井やハヤ困ッた
◉日清都々逸
◉同　文句入
◉ちやり舞歌
○城の番塲○種蒔權兵衛○棚のだるま○月がかさなりや○沖の暗いのに○因州いなば
◉日清流行歌
○愉快ぶし○勝利ぶし○日清甚句○チヤ〳〵ラカチヤン節○トンヤレ節○仙臺節○丹后節○若狹ぶし○ドン〳〵節○ノンノコサイ〳〵節○トコシヨイ節○金來々ぶし○琉球節○やツつけろ節○ヨカチヨロ節○ギッチョン〳〵節○チヨンコ節○きいちよ〳〵れ節○ホーカイ節○のーね節○ヒヤヒヤ節○すいりやう節○追分節○かまやせん節○堪忍してくれ節○シンカラ節○本田ぶし○梅が枝○軍さぶし○おッぺケペー節○ヘラ〳〵節○米山甚句
●滑稽奇話＝滿州の冬籠り
◉日清二上り新内
◉義太夫文句日清見立
◉日清大津繪ぶし
◉日清かいあん寺
◉ゑんかいな節
◉トッヤリトン節
●滑稽奇話＝慈姑の豐作
◉おか支那軍歌
◉日清狂歌
◉日清狂句
◉日清今やう唄

◉日清落語
○豚帝も日本兵に勝れぬ哩○旅順を攻めて落し咄し○安藝の吳○兵器は平氣○財産を擺ふ豚尾兵○清艦にも鳥○三國一○必死年○一口ばなし○色々の話し
◉娼妓隊の號令
◉日清地口合
◉花柳社會當世隱語
●新春餘興＝すれ娘
附、墨ぬられ男
●花の秘訣＝決して人々に負けぬ法
◉滑稽演說＝强兵新策美人軍

目次終

日清滑稽流行歌 大博覽會

松の家みさを 著

◎三番叟

お、さへ〜悦びあるや〜我此占頭地は何處へもやらじとおもふ

足音トン〜

「太郎冠者あるか「御前に

「ねんなう早勝た太郎冠者に申事の候本年は旅順の笑

ふ門口に福はきのとの新年を迎へ目出度こゝに雑煮の餅を祝ひまつた酒をも汲みて十二分の歡びを盡したが此機を外さぢ猶も打立ちて北の京へ押向はゞやト存ぜる程に早う飲みて用意を爲し候へ

「ハヽア急ぎ候程に飲まぢト打立たばやト存じ候アレ〳〵敵はパヲ〳〵遁げ延びて候「遁るまいぞ〳〵

◉お座附

「春のあしたの御年始客や。兼て戰勝の祝宴事。四百餘州を占めかさり。さて勝のこの(チヤン)お重づめ。

「人足しげき年の尾や。目たつ屋毎の見世かざり。支那大敗に積かさね。めでたく迎へる勝月の。新春まち顔や(チヤン)庭の梅。

◉日清替唄一

君が代

君が代や朝日に匂ふ菊の門。雪にたゆまぬすがたかな。清國列國のはてまでも。輝きわたる日の御旗。

同

勝祝ふ盃かをる屠蘇さげん。其移り香に神かけし。おもひは同じ春ごゝろ。福祿壽や未どし。

梅にも春

夢にも君の事問ふと。我身の上は苦にもせで。心せわしくとつおいつ。朝日かゞやく旗影も。若やと思ふ戀の慾。征夫は無事か健康か。先辻占や風なき。逢て嬉しや幻にも。

秋の夜

冬の日は。寒い物とは白妙の。雪見る人の心かも。更て寂しき陣々に。音づるものは風ばかり。天幕に當る玉霰れ。若しやと思や寐付かれぬ。

行くれて

行くれて。木の下かげを露營とせば。北風さむく雪ぞちる。戈を枕にふゝきのしとね。稽くやあられの音さいて。篝たく火の影凄く。雲間をあたる鴈金の。一羽後れて啼く聲に。哀れ彌増す旅の空。

我もの

我ものと。おもへばうれし支那の土地。國の御旗を先にたて。攻め取り行けば日の本の。太刀風寒く豚尾なく。逃ぐるに早き敵のやつ。はんにいくじがないわいな。

雪は巴

雪は巴に降りしきる。山又山のたゝ中に。敵の樣子を見探りて。本陣にかへる斥候兵。なか〳〵强ひじゃないかいな。

淺くとも

辛くとも。清きわかれは國の爲め。はんにものうき月日さへ。やがての凱陣たのしみに。神をねんじて待わいな

同

かしてくも。强きはまれの日本國。ゆくてあまたの清兵を。除いてきたれきすちを上。支那が欲しうはないかいな。

かれ細る

枯細る。冬の野營の虫の聲。誰にこがれて啼じゃゝら。更るに凄き

月影や。君に心をおく霜の。とけぬ一と夜がうらめしい。

同

顔やつる。文の便りも主はせぞ。何地にどうして居る事か。待身につらきをんな氣の。遙ぶて手柄のき、たさも。遂へぬ一夜がうらめしい。

一人寢

一人寢の。淋しさ呀へる耳の底。かすかに叩く閨の戸は。若しや號外かとだまされる。氣でまた開けて照らされて。知らぬ月まで恨み事。

夕ぐれ

夕暮に。ながめ見渡す旅順口。渤海黄海うみつゞき。旭日の旗が見

ゆるぞへ。アレ船が來るアノ船は。つよひ日本の軍艦じやいな。

一夜明れば

一夜あくれば又氣も勇む。軒にひら〳〵日の御旗。初音一聲新聞號外。ホウホ、けふも日本の大勝利。實に嬉しゞやないかいな。

けさ結し

けさ結ひし。辮髪もいつしかみだれがみ。人に聞かれてはづかしや勇氣かざれど目に浮む。涙を鼻汁と夕まぐれ。手傷になやむ支那の兵。

明暮に

明暮に。どうか黄河と李鴻章。心苦にいとゝ痩る身の。暫しまどろむ目先にも。旭日の旗があり〳〵と。見へしは夢か氣の迷ひ。覺て

はかなき闘の中。

色がある

邪广がいる。承知で攻たチャン〳〵坊。攻めゆくからはあくまでも。攻てこらさにやならぬぞへ。

松づくし

傳へはやせん清國。一番目には牙山の負け。二番豐島の沖の負け。三番目には平壤で。四番目には海洋島。五番鴨綠九連で。六ッ無暗に恐がつて狼狽にぐる弱い兵。七番目には鳳凰城。八番目には旅順口。九ッ心も有頂天。十ど北京も落城し。日に負け。時負け。暮に負け。連事の負けに四百余州もこなみじん。

十日戎

支那夷の卑怯者は。日の丸御旗を見るとすぐ。小づゝに大砲槍刀。米麥粟に金銀塊。みな打捨てにげて行く。

おとし文

いつかたへ。敗けて引くらん支那の兵。旅順に金州復州と。敗くたびく〳〵に逃げまとい。てつぽうの音に眼もくらみ。こわい〳〵の忍びねも。泣く〳〵に泣かれぞ有明の。月に耻かし迷ひ道。

一すあいのくさみに笑話一片

●井やハヤ困つた

大石だの大鳥だのと大の字づくしに困つて居たが。併しまだ大の字だけに大扱けのした所があるから何かと云つてはヌラリクラリと抜

け廻つて居たが。今度は井
桁の首ッ枷とは閉口〳〵。
手寄い事は無いにしろ。我
朝鮮人の井上イナ目の上の
瘤だワイ。

◉日清都々逸

○赤い心のない支那兵は黒船とられて白い旗
○敵は怖れて混成旅團すゝみ易さの支那の土地
○かつた〳〵と支那兵のいふは苦しかつたと怖かつた

○狭い露營も苦勞にやならぬ勝て身巾の廣い今日
○水も、らさぬ日韓が交情を何のいとる井戸會議
○替る言葉の支那玉男なにをいふやらわけもない
○リコウシャウなど名前がすぎるホンに馬鹿げた毛唐人
○女ながらも軍人の女房未練に首途をとめはせぬ
○軍さぞなへも立たない筈よ腰拔ばかりのチャイナ兵
○歸る戸口とチャイナの兵は兎角後ろへ氣が引る
○兵の數さへ嘘夕月の影法師さでかぞへてむ
○泣たい所も忠義の二字で無理な笑顔の可憐しさ
○李鴻章とてその御ざまは目にはかゝさぬ涙雨
○深い智畧の我海軍にまけて淺瀬へ逃げる支那

○癌病か臆病風か北京天津みなふるふ

○佐用姫の石になつたは昔の事よ支那の海軍水泡となる

○清國なんど、口ではいへど腹はきたなき濁り水

○自業自得と云やいふもの、可哀そうなよ李鴻章

◉同　文句入

○思ひ込んだる俠兒の意氣地

「從レ是二千三百里、北辰直下建二銅標一」

積雪に屍骸は埋むとも

○堅い固めといはれし平壤も

「扶桑第一梅、今宵爲レ君開」

日兵の勇氣に落つる今日

○主は此頃戰場の住い

千両幟「留主は猶更女氣の獨りくよくよもの案じ」

思ふ心が知らしたい

○寫眞手にもち柱にもたれ

三勝「今ごろは牛七さんどこにどうしてござんすやら」

思ひあまつて獨り言

◉ちやり舞歌

城の番場

○城の番場で。日和がようて兵士が喇叭吹く。俄に號令諸隊進め。兵士一同喜び勇んで。直ぐと駈出す。負てはならない。勝たいわいナ。

○支那の艦隊が。きげんがようてか海洋島へ一寸出る。俄に日本艦

隊。進み追まくる。艦隊支那兵がうろたへ騒いで逃げまわる。たすけてお呉れ。コーワイわいな。

種蒔權兵衛

○我兵が取りまく。豚尾はにげだす。三度に一度は追はぞばなるま い。トンビ等〳〵〳〵。

○向ふの軍艦眺めて見れば。十七八隻無暗に撃たれる。何かは耐るか。四隻は沈没。三隻は燒棄て。豚尾等〳〵〳〵。

○支那人固める。牙山は取られる。平壤も敗られ。日本に一度も勝つと出來ない。豚尾ら〳〵〳〵。

棚のだるま

○あまりしんきくさいに。棚の南瓜をちよいとおろし。なげたり蹴つたり。又ころばしても見たり。

○あまり戰爭よはさに。からの天子樣はちよいと怒り。腹をたてたり。マタなだめたり。

月が、さなりや

○敵が來たなら命が危いどしよぞいな。お醫者さんでも呼んで來か。

サアサ逃げてけ飛んでけ。

沖の暗いのに

○船の黑いのに白旗見ゆる。彼れは支那國。ヨイヤサ降參船じやエ

エ。

因州いなば

○滿州みなとの牛莊の。しかも大道の眞中で。チヤン〳〵が三人出

合しが。先なるチャン〳〵は弱兵で。中なるチャン〳〵は怯兵で。あとなるチャン〳〵は病兵で。先なるチャン〳〵の言ふことにや。牙山で日本兵に會ふた時は。勝氣でボン〳〵打たけど。中らいでコソ〳〵逃出した。中なるチャン〳〵の言ふとにや。平壤で日本兵に負た時は。あはて、田甫へこりこみ。ぬるりやぬるりと這ふてにげた。後なるチャン〳〵が云ふことにや。旅順で日本兵が追ふた時。杖をつきつ、。ころりやころりと遁げ出した。思ひ出して怖ごさる。

◉日清流行歌

愉くわい節

○日清談判破裂して。悲風慘憺雲漠々。宇品乘出す陸海軍。思へば昔し其昔。西郷死んだも渠奴が爲め。江藤殺すも渠奴が爲め。遺恨重なるチャン〳〵坊主。日本男子の村田銃。筒の尖頭へと劍つけて。なんな〳〵支那人打倒し。萬里の長城乘越して。一里半往きや北京城愉快々〳〵。

○廣島よい所ぢや。大本營が出來て。數多の文武官が來つちよつて居つちよる。

愉快〳〵。霹靂一聲夢さめて。ウンらいコンらいいつ〳〵ばつ〳〵のばー〳〵。

勝利ぶし

○コリャ〳〵ちやん〳〵聞けよかし。汝の國と比較せば。成程版圖は狹けれど。朝日に匂ふ櫻花。日本魂しらないか。うとの大木骨がない。無分別にも程がある。汝の我に敵するは。龍車に向ふ蟷螂の。

迚も叶はぬ事ぞかし。「笑止千萬憫笑の至り」。ちやん〳〵坊主の意苦地なさ。

帝國萬歳。勝利じやないかいな。勝利〳〵〳〵

○コリヤ〳〵チヤン〳〵聞けよかし。汝の國は廣〳〵して。頭の數さへ多けれど。忠義の心は更になし。汝の輩は脊は高く。身に着く衣服もド太きも。肝じんかなめの膽玉は。南京玉よりチイさくて。「足はあれども腰はなし」。チヤン〳〵坊主の意苦地ナサ。

帝國萬歳。勝利ぢやないかいな。勝利〳〵〳〵

日清甚句

○今度此たび征清事件に就てチー。あまた戰爭のある中で。最も手柄は旅順攻め。東洋一の砲台を。また〳〵中に攻落し。旭の御旗押立て、。肩には名譽の村田銃。腰には鋭き日本刀。昇る朝日に閃めかし。凱歌あげたる勇ましさ。タシカ大將は名も高き。大山さんに山路さん。されど未だ〳〵前途長し。早く進んで牛莊や。山海關を踏みにじり。北京の城を乘取て。城下の盟をなすまでは。決して油斷はエーエーなりはせぬ。

○今度此度平壤攻擊に就てチー。忠勇無双の我兵は。一歩も引かぜ退かぜ。さしも堅固の敵壘を。一日一夜に攻落し。二万余人の清兵を。もの、見事に打倒し。尚も勇氣をはげまして。日に〳〵進む進軍は。向ふ敵なし障碍なく。鴨綠江をも打渉り。又も九連攻取て。今に北京の城頭で。日本勝利の凱聲を。揚で益々威を示す。活潑愉快の凱陣は。是れぞ日本のエーエー大名譽。

チヤ〳〵ヲカチヤ

チヤン節

○日本の意氣地はよつぽど強いもの。朝鮮獨立さすチフテ。義兵派遣する。チヤ〳〵ヲカチヤ〳〵。

○日本の兵士はよつぽど強いもの。寒さも厭はんチフテ。雪中に進軍す。

○支那の兵士はよつぽど弱いもの。旅順さへ守れんチフテ。ちりちりばーらばら。

○支那の艦隊はよつぽど弱いもの。戰さが怖いチフテ。影かくす。

トンヤレ節

○皆さん〳〵。日本兵の前にペコ〳〵お辭義は何ぢやいな。アレは降參の豚尾兵が。助命を希ふを知らないか。トコトンヤレトンヤレナ

○皆さん〳〵。御門の前にフラ〳〵するのは何ぢやいな。アレは日清戰爭全勝の。祝ひの旗を知らないか。トコトンヤレトンヤレナ。

仙臺節

○國が大きとてけんたい振な。國が大きて兵多て。それで軍さが勝てるなら。清國豚尾兵平壤で。ドウして日本兵にコレナンダイ勝てなんだ。

丹后節

○二度とやるまい日本と戰爭。支那の財府がカラとなる。澤山のお金をドンドと出した。

○日本とやるまい海上の戰さ。支那の軍艦水泡となる。澤山の軍艦ズツト減つた。

○二度といくまい日本兵のそばへ。支那の死骸が山となる。チヤン〳〵頭が澤山飛んだ。

若狭節

○支那の陣屋を覗て見れば。アホーラシーヂヤオマヘンカ。二ツ枕に三ツ蒲團。コレサ官妓の襲衣トコヤツトコヤツトズイトズイト。

ドン〳〵節

○日本兵士の打だす彈丸は。ドン〳〵。一ツもあだな〳〵的中す。タイチヨカチドン〳〵。

○來るか〳〵と支那兵を待てば。ドン〳〵。濱の松風音ばかり。タイチヨカチドン〳〵。

○爆て飛散る榴散彈で。ドン〳〵。支那の砲台こなみじん。タイチヨカチドン〳〵。

ノンノコサイ〳〵節

○威海チヨイ〳〵。心配頭痛八卷で。ノンノコサイ〳〵。芝罘チヨイ〳〵。大さわぎ。ノンノコサイ〳〵。シテマタサイノサイ。

トコショイ節

○四百余州がヒリ〳〵ふるふ。朝日に輝く旗風に。トコショイ〳〵。

金來々ぶし

○止せばよいのに唐威張。無分別なる豚尾坊。きびすかん〳〵。打出す大砲。軍艦沈んで水の泡。チヤン〳〵ぶ〳〵。西瓜を浮べた。大べらぼうの行止り。

○李鴻章が。忍び泣すりや袁世凱も共に。もらひなきする阿房鳥。

日本。攻る。強い。追つめられたら叶はんチ。すッちやんころりと大負けの。大べらぼう。アホーラシイジャオマヘンカ。

○豚を買ふなら滿州が本場。肉は鹿の子で値は廉い。目方たんと。意外の廉價。切賣おろしも。たくさんに。皆さんどん〳〵。買いなはい。支那大敗の。金かんぱん。

○水雷火伏せて豚めて。三度に一も。當ッたことない不甲斐なさ。規律。立ぬ。遺憾。至極。すッちやんころりと皆なスカで。チヤン〳〵艦隊あきれ顔。おもしろいやおまへんか。

琉球ぶし

○旅順おちるなら。北京も折れる。四百余州は滅茶〳〵。したりやよろ〳〵。滿は負け〳〵。支那さん〴〵。

やッつけろ節

○豚めが降參せぬ中は。その中や中戦いらないよ。北京丸焼き。ッヲ。やッつけろ。

○清國軍艦見附けた時にや。其時や猶豫はいらないよ。大砲ドン〳〵ッラやッつけろ。

○日本の正義を邪魔する奴は。獨逸コイッの英魯なく。嚴重談判。ッラやッつけろ。

ヨカチヨロ節

○手出して見ろ。只置くものか。ばつばよかちよろ。赤髯奴もみな殺し。ばつばよかちよろ。すいがすはのはゝで。わしがしつちよる。しつちよる。いはいでも。しれちよるばつば。

○いづれしまいは。日本のものよ。ばつばよかちよろ。御氣の毒だが四百州。ばつばよかちよろ。すいがすはのは、で。わしがしつちよる。しつちよる。いはいでも。しれちよるばつば。

ギッチョン〳〵節

○南瓜たくさん北京でもらい。ギッチョン〳〵ギッチョン〳〵。つなぎ合せて國土産。オヤまたこゝにもコロ〳〵落てる。チャン〳〵ヨウイヤサ。ギッチョン〳〵ギッチョン〳〵。

チョンコ節

○いらんチョンコして恥かさちらし。チョンコ。今更後悔臍をかむ。チョンコ。

さいちよくれ節

○聞いちよくれ。聞きます仰しやれ何ですか。日本兵が怖いと臆病神に。引かれひかるゝ。トコナンダイ。葉子超さんゝきなはつたかし。おやそうですか。エーうしろ髪。

ホーカイ節

○支那の兵士は何故弱い。來ると其儘逃げまする。アホカイ。其くせ無法にあばれます。恥しらぬ。

○日本の兵士は何故強い。生命惜まぬ進みます。ソウカイ。そのくせ中々温順しい。規律嚴重。

のーゑ節

○萬里の長城のーゑ。萬里の長城のーゑ。萬里さい〳〵長城なんな〳〵破り。一里半ゆさやのーゑ。一里さい〳〵半ゆさや北京城。おッ

ひきしやらりこのーゑ。おッぴきしやらりこのーゑ。ちいちがたい〳〵。とゝち、。おッぴこひやらりこのーゑ。

○大孤山からノーエ。大孤山からノーエ。大孤サイ〳〵山から海戰見れば。支那の軍艦ノーエ。支那の軍艦ノーエ。支那の軍艦。遁げまはり。丁都督轉んで氣絶する。オッペコヒヤラリコノーエ。オッペコヒヤラリコノーエ。チンチガタイ〳〵。トヽチヽ。オッペコヒヤラリコノーエ。

ヒヤ〳〵節

○進ましやんせ。進ましやんせ。滅法矢鱈に進ましやんせ。途に山あり。川あるも。天津太沽何のその。チヤモー北京だ早いこと。ヒヤ〳〵。

すいりやう節

○何をエー。推量〳〵。小癪なチャン〳〵坊主。ちよいとさのよやさのさ。やまーと。でりやしよい。魂を。じつ。知らないか。よいやさアの。よいやさ。さいと。ありやさ。こりやさー。やーとせ。せのゑ。ありやすりやう〳〵。

○讀んでー。すいりやう〳〵。嬉しき此の新聞紙。チヨイトサノヨヤサノサ。又も。コラショイ。日本の。ジツ。大勝利。ヨイヤサアノ。ヨイヤサ。サイト。アリヤサコリヤサ。ヤートセ。セノエ。すいりよう〳〵。

追分ふし

○アヽエ。意地を張ッても迚もじやないが。朝日の御旗にや叶はせ

ぬ。スイ〳〵。またもチャン〳〵負けたかホイ。お氣の毒じゃがしかたがチェ。

かまやせん節

○お前は支那の李鴻章。心配に。やつれてお顔は眞青ケ。こちやかまやせん。こちやかまやせぬ。

○築けば築け砲臺場。築くとて攻道具のないではあるまいし。こちやかまやせん。こちやかまやせぬ。

堪忍してくれ節

○盜んだ軍用を言はれちや困る。懷中がカラなら妾はをけぬ。堪忍してくれ瘦るワイ。

○旅順口をば取られちや困る。威海しんはいどしうぞいな。堪忍してくれ瘦るワイ。

シンカヲ節

○支那を攻めるなら。トコまで攻めしやんせ。支那は横着で。圖太い奴じやと思はんせ。兵站部で十分兵糧貰ろて。進めば。シンカヲ〳〵眞から強い。日本魂と。支那のチャン〳〵坊は競べられない。

本田ぶし

○旅順落すりや。敵はちり〳〵。にげる。にげりや追かけ。ナイシヨ。鏖殺し。これが大和の魂だ魂だ。

梅が枝

○チャン〳〵の章魚坊主。負けて力が盡きたら。盡きて降參たのむなら。その時や降參ソーレ許す。

戰さぶし

○軍するときや横槍入れな。臺場とる時や喊の聲。
○こゝに寐るのも今晩かぎり。明日は萬里の長城枕。

おッぺけぺー節

○婦人なりとて御國の民だ。義務にかはりは有はせぬ。オッペケペ。
オッペケペッポーペッポーポー。御國の大事をヨッに見て。うか〳〵暮しちやすまないヨ。矢鱈にお尻を撫でまわし。俳優に惚けるひまがありや。綿撒糸など拵へなはい。旦那に内証のへそくりが。あるなら献金するがよい。戰地は中々お寒いよ。手袋なんども必要だ。御國の爲だ献じなはい。お絹布ぐるみで暮しても。國民の義務を知らなけりや。皇國の名折た氣をつけろー。

ヘヲ〳節

○ドッコイ南京さん〳。お前の髪は長いヲ。べらぼうに長いヲ。
ドッコイへら〳へ。はら〳は。べらへのへエー〳。ドッコイこれをヲ。つないで日本へ。捕虜に送られる。へら〳へ。はら〳は。へらへエ〳〳「赤い手拭の始り〳」あかい御旗の日の丸國旗。それを掲げてお目出たい。へら〳へ。ひり〳ぴ。ひりひのひー。大砲が鳴つたらお逃げなはい。大將さんがヲ。日本兵に逐はれて。にげるさま見ればヲ。涙がポロ〳〳。へら〳〳へ。はら〳は。へらへエーのへー。

米山甚句

○打とか殺そかチヤン〳坊主。支那は國の仇文明の仇。

●滿酒の冬籠り

拳天を斯う脊中で押へ。牛莊を肱で突き。旅順を斯う足で蹈んまへながら。豕鍋でジョ〳〵と。滿酒の冬籠りもしやれてゐるが。早く臺灣の樣がわを占領して。そこで日向ぼつこも亦妙だゾ。

◉日清二上り新内

○虎と見て。石に立つ矢もあるならひ。征清一統何事か。遂げねば置かないわしが胸。

○遂に來たのに情ない。居るか居ないか威海衛。打つに打たれぞうろ〳〵と。行つ戻りつ主の門。

○さしも堅固の旅順口。やみ〳〵日本に攻取られ。さすがの李爺もガッカリと。弱り果るぞ笑止なる。

○君の御爲め兼てより。覺悟はきめて居ながらも。せめて北京へ攻入て。

○無理どめせぞとそこ放せ。やがて凱陣するほどに。そなたの心は嬉しいけれど。御國の大事にかへられぬ。

○不敏なれども軍人の女房。今日の首途は兼ての覺悟。わしや泣きはせぬ。留めはせぬ。天晴功名たてしやんせ。

○御國の爲に悴めは。健氣な討死しましたと。口にニッコリ眼に涙顏をそむくぞ哀れなる。

◉義太夫文句日清見立

○重ね〳〵のなげきの數……（支那の連敗）

○はぢも慮外も顧みぞ……（清將の敗走）

○今の憂身のはづかしさ……（李鴻章）

○夫に怪我のないやうと……（葉志超の妻君）

○早や〳〵飯を食はしてや……（支那の捕虜）

○せめて人らしい者の手に……（鐘崎氏）

○留守は猶更女氣の……（征清軍人の細君）

◉日清大津繪ぶし

李鴻章の寢言

支那の李鴻章の寢言を聞けば。私しほど因果な者はない。死にぞこないよ老耄と。世間の人にくさいれて。何ほうゝしい私とても。どの面さげて世にたとうぞ。活て居る氣はなけれども。さりながら。此長年のその間。掠めてためた此金が。心殘りで死ぬに死なれぬと愚痴こぼす。

敗け戻ト

敗け戻り。まのわるさ。僅かの金で傭はれて。モウ〳〵こり〳〵した。二度とは行ん傭兵に。ドレ〳〵在所へ歸りましよう。ぞうすい

たかして腹なをし。さりとては余り殘念口惜い。どうしやう知らん。
イッそとやけて又いこか。イエ〳〵それでは命がないと。嬶アの意
見で。ソレモそうかいな。

◉日清かいあん寺

○アレ見やしやんせ支那の船。密に火の手が立上る。これも何故よ
わい故。
○アレ見やしやんせ支那の俘虜。破れ衣に破れ笠。これも何故まけ
軍さゆへ。
○アレ見やしやんせチャン〳〵が。兵器兵糧みなすてゝ。足もよろ
〳〵逃てゆく。
○アレ見やしやんせ今日も亦。配る號外二號文字。嬉しいぞへ大勝利

◉あんかいな節

○號外待てど便りなく。待身につらさ遣瀬なさ。來るは蕎麥屋の鈴
ばかり。ドーセ今宵は來んかいな。
○今度の海戰は。渤海で。出船入船。軍さ艦。放つ大砲水雷艇。又
も日本の勝かいな。
○今度の陸戰は。奉天で。雪の中での大軍さ。放つ日本の村田銃。
打貫〳〵大砲のドンかいな。
○軍する度まけつめで。いつもちり〳〵遁げ走る。チャン〳〵坊主
の耻しらぬ。偶には勝ても見んかいな。

◉トツナリトン節

捕虜

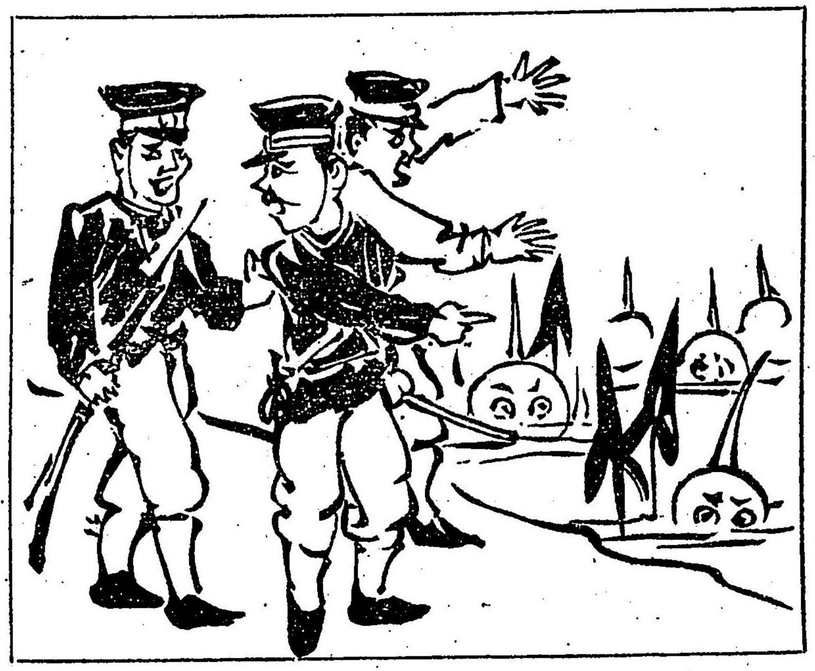
見るも穢ないチャン〳〵俘虜。破れ衣に敗れ笠。足は跣走や片足く
つ。缺けたお椀を腰にさげ。啜る水ばな。かく虱。耻も慮外もかへ
りみぜ。乞食のような風体で。ノンコの洒アと引かれ行く。

傭兵

不憫なものだよ彼の支那兵は。安い給金で買出され。持たことなき
鐵砲を。かたげて軍さ、せられて。强い日本兵に惱まされ。向ふ水
溜。田の中や。泥にまびれてうご〳〵と。腰を抜してよう立たぜ。
さながら慈姑の如くなり。

●慈姑の豐作

今年や慈姑の大當り。田にも畑にも慈姑の天窓を見ぬ
處はない。此分では今に渤
海變じて慈姑田となるも遠
からぜだ。
なんと愉〳〵わいな眺めじや
ないか。



おか支那軍歌

退軍歌　其一

逃げよ逃げ〳〵皆共に
日本は素敵につよい國
つよいと弱いが戰へば
命取られちや堪らない
恥も外聞もいるものか

スタコラヨイヤサと駈出よ
此方はベラボに弱い國
どうせ弱いが貧なるぞ
いのちあッての物種ぞ
早く貧くべし駈るべし

其　二

逃げよ逃げ〳〵皆共に
縦ひ弱いと言はれうが
日本人にはかなはない

スタコラヨイヤサと駈出よ
腰拔兵士と笑はりよが
首を切られちや命なし

若しも命のないときは
鐵砲で打たれぬ其中に

其　三

逃げよ逃げ〳〵皆共に
もと我々が出て來たは
ホンの些さいな日當で
國のためとは何のこと
今更言ても無駄なれば

スタコラヨイヤサと駈出よ
いのちを捨る爲ならぞ
いはゞ人そく同やうぞ
それじや約束違ひなり
何でも搆はぞ逃るべし

何のたのしみ有べきや
人に搆はぞ逃げるべし

其　四

逃げよ逃げ〳〵皆共に
給金わたらぞ錢はなし

スタコラヨイヤサと駈出よ
物をも食はぞに腹密し

おまけに前は敵なるぞ
こんな馬鹿氣た事はない
何處の何兵衛に義理が有

其五

逃げよ逃げ〳〵皆共に
我はチャン〳〵先方は
ことに鐵砲も上手なり
とても我等のやせ腕で
苦しい思ひをせぬ中に

◉日清狂歌

○闇暗の耻明るみに出すものは提灯さげし支那の敗兵

ウカ〳〵してゐりや首コロリ
こんな詰らぬ事はない、
命のある中逃げるべし

スタコラヨイヤサと駈出よ
天下はれての人間ぞ
ことに刀も切れるなり
日本に勝やう筈はなし
逸足はやく逃げるべし

○後髪きるに斷られぬ思ひ哉姿殘して歸へる豚尾男
○今かゝらは少しも法螺は吹けぬなり疾も旅順の口を取れて
○賜はりし君が惠みの烟艸のまぬさきより咽びなくらん
○其名さへ和尚島とて殺生の掟やぶらす取し砲臺

◉日清狂句

○あたまから尻尾を出して清兵逃げ
○大鳥はあとをにごさぬ任所たち
○見たとこは李鴻章でも實は馬鹿
○清國といへど心は濁りがち
○北京落ち軍事こうさい上るなり
○戰爭のたまご雞林からかこう

○椅子山をとつて日兵こしをかけ
○いきついてモー法螺吹けぬ支那の國
○狂心王ゆへ方針もみだれがち
○豚兵は猪しほどの勇はなし
○日の照りの强さに李枯れて落ち
○琉球をめざすは蚤のやうな奴
○牡丹臺獅子奮迅の勇に落ち
○烟艸も吸はぞ目を廻す兵站部
○日兵はラッパ支那兵法螺を吹き
○廣島は狹くなるほど繁昌し
○旭の光り淸のやみをば明るくし

○敗る氣で皆チャン〳〵と逃支度
○龍頭蛇尾はその國旗見ても知れ
○菊の香にとても及ばぬ芥子の花
○芥子坊主吹けば散るほど弱い奴
○分捕りも兵器とすます支那の軍
○かなはぬと見切ッてシナは矢鱈まけ
○やがてチャン〳〵と北京は早牛鐘

◉日淸今やう唄

○北風さむく吹暴れて。凍るばかりの冬の夜に。雪に埋まる丈夫の。
積る思ひや如何ならむ。
○野邊の草葉も枯果て。雪に埋まる細徑の。月も幽になるうちは。

何をたよりに辿るらむ。

◉日清落語

豚帝も日本兵には勝れぬ哩

如何です日清事件は「イヤモウ豚尾軍の弱き加減は實に呆れたもので彼の山路將軍はこれではドウモ日本男兒の腕前を見せる事が出來ないト云つて不滿たらく〳〵だそうでス。それに引きかへ豚國皇帝は旅順口を取られたと聞かれた時は實にオヒ、の吃驚シヤックリ仰天天挺舞をして一方ならぬ騷ぎであつたさうだつけ「ハアそれはそうでせう東洋一とも云はれた要害を僅々二十四時間に陷落されたのだから「實に手もなくさねェ「手處か近々の内に首もなんにも殘らぬ刎ね落して仕舞ふのは譯なしサ「さうとも〳〵今となつてはイクラ

清兵しても間に合ぬ六日の菖蒲十日の菊には及ぶ所にあらぬサ「なんにしてもドヾの詰りは白旗をおッたてものたテ「だから豚帝も日本兵には勝れぬワイと威海御心配た想です。

旅順を攻めて落しばなし

第二軍が旅順陷落后の事とか我兵士は五六人づゝ隊を組んで彼方此方に何者をか追ひ立てしきりに銃殺したといふ話しだかマサカ戰場で兎狩でもあるまいテ「そりや兎狩ではないが矢張類似の事だつたのサ「類似の事とは「ナニサ逃げかくれて居た豚を狩たのサ。

安藝の吳

鎮守府のある吳港は安藝の國だね「馬鹿を云ひねへ安藝ではない「ナニ安藝に違ひないヨ「ナゼ「デモあきのくれと云ふぢやア無いか。

兵器は平氣

牙山でも平壤でも九連でも旅順口でも。豚尾漢はイッモ澤山武器を捨て逃げるが一体渠奴等は武器を何と思つて居るのだらう。「サア大方兵器(平氣)だと思つて居るのだらう。

財産を攫ふ豚尾兵

日本の軍隊は規律が正しいから道すがら物を掠むと云ふやうの事は微塵もないが支那兵はマルで盗賊仝樣やそうですチヘ「そりや其筈よ「ナゼ「渠奴は豚尾だもの物をさらへるは當然だ。

清艦にも鳥

御幣擔ぎとお笑ひかも知らないがドーモ今度の軍さに就ちや不審なことが多くありますチ彼の九連城で犬が身代りに地雷火にかゝつたり海洋島沖の戰ひに我軍艦の甲板へ鳩が下りたり檣に鷹が留ッたりとうも不審ですチ所謂神助とも云ふのでせうか「そうでせう併し清國の軍艦にもいつも鳥が澤山居るらしい「ナニ清國の軍艦に鳥が澤山そりや何鳥です「ナニ鳥ッて彼の軍艦の沈沒した時にはトンビが澤山溺死したぢやありませんか。

三國一

日本は强氣な國だ大したもんだ何ッてッてへ御富士樣が有は彼のチャン〳〵國は勿論西洋にもないから三國一だ素ばらしいもんだ「これ〳〵そんなと言と學校へ往く兒供に笑はれるぜ「ナゼ……「何故ッて世界第一の高山は印度のヒマラヤ山で日本の富士より高いと七八等も上だ。輕氣球も其半腹へ登るとが出來ぬ何しろ半分より上は太

古以來の雪が消ぎに其儘と云ふ位だ「ヘン否ねへ〳〵夫は半分雪で高くなつて居のだ。誰が雪を拂つて眞個に測量したエ。

必死どし

去年は午の年だつたから馬玉昆など云ふ弱虫の隊長が各譽を博したが今年は未の年と來て居るから何か羊何とか云ふ支那人が又々浮名を流すでせう「マサカそんな事もあるまいが兎に角今年は日本に取ては福はきのとで支那人には必死の年だ。

一口ばなし

○奉天の寶庫にはドッシリ金があるだらうか「ナニ有るものか唐(空虛)の寶庫だもの。

○アー澤山南京を積歸て何するだらう「陸海軍の晩菜(萬歲)にする

色々の話し

一黃州の戰に彼の清兵は青龍刀を揮つて我軍に挑みしが終に白旗を掲げて赤恥をかきしは面黑い茶番なり

一黃海の海戰に彼の黑船は緋の本の大軍に破られ白旗をかゝげしとの由定めて支那鼠負の碧眼赤髯奴も驚いたろう

●娼妓隊の號令

○氣を付ケー娼隊

樓主より秘密の演說コッコリとして謹聽は是ぞ娼妓の虎の卷

○娼隊トマレ

檢査日は又病院かヘチャ否だチー

○廻レ

酒もモウよい頃也と遣手の氣轉に座敷を切上げあちらへお床入り

○娼隊右向ケ

初會の顔見せ葉がくれの花と云
ふ趣、茲が娼妓の極意なるべし

○娼隊止レ休メ

引過まで馬鹿らしくも店ざらし配
所の月も思ひ出されて哀なりけり

○娼隊後ロ向ケ

昨日の紀文今日の伊左、高尾の馬鹿は今
時無と云ぬ許の顔付にて金が有つたら又
御出と後ろ向きペロリと舌を出すなり

○早足進メ

待に焦れし主の聲に手の舞ひ足の踏音カタ〳〵
ちんばの艸履をはいた儘あとは云ぜと知たこと

◉日清地口合

○敗るばかりで……南京なことじや

○一寸見は中々……李鴻章じやが

○急に日本兵が攻込で……びつくり奉天府

○旅順口が落たので……威海心配じや

○支那は軍艦を沈められて……黄海〳〵

○度々戰爭に打負て……大清敗じや

◉花柳社會當世隱語

○戰鬪力を失ふて居る……お金の無いこと

○日本の兵士で……威張たもんじや

○支那の生擒で……うう〳〵しい

○樂志超には困るな……逃げられたと

○袁世凱じや……遁げるより手はない

○李鴻章じやないが……近頃大ふさぎだ

○海洋島でサン〳〵サ……情婦に途中で見つかつたと

○某國が居るそうです……女に虫のついて居ると

○支那の虛勢で……いぶばかりじや

○地雷火のあとで……惚れて居る

○支那の兵士で……受けがわるい

○支那の艦隊で……彫かくす

○沈んだ軍艦で……深い中じや

◉新春餘興――すれ娘

天麗かに氣朗かに千門萬戸熙々洋々、新年と戰勝と目出度〳〵の合併せしとて町々辻々祝旗宛ら星を列ねたらん如し婦女兒童も例年よりは一層喜び勇み戯る中に、疳走つた聲をして無暗に可笑がる娘羽根を突き乍ら一夜に二夜三つ寢りや嫁子いつしか婿がくる、アレ〳〵邪广をしちやア嫌だト言のに安さんおよしヨ、オホ、、お前の顏は何うしたのペンキ屋の看版よろしくだチへ、ナニへ色が白いから眼につくとへ黑くッて眼につく位だものチ何處で突たのア、横町の桶屋でかへ彼處にはい、男が居るチへ家の桶はいつも彼處へ遣んたヨ、ナニ夫よりお尻へ繼をはめて貰つたら宜らうト、ヘン馬鹿らしい夫よりお前の出額へはめればい、、アレおよしヨウ不景氣ナ、アア追羽子かへ墨の塗ッこでも何でもお出、モシ長さんめかして何處

へ行のナニ南地へ一所に行ないかトア、行たいけれと妾の樣なもの
と並んで歩くとお前の男ぶりが下るからお氣の毒たワ、アラ誰だへ
突然に背中をた、いて、虫が起るワ、アヲ春さん驕りに行のなら拉てッてお呉れイ、ヨ知ない振をしても知てるヨお花さんへ宜しく、オヤ叔父さんおめでたう御年始にお出かけなの、晩に入つしやいナ何ぞお土産を澤山、安さんサア突うぢやアないか誰だへ御夫婦なんテ、アヲ松さん憚りながらさういふお見立では困り升ヨ内裏さまの方が餘

ッ程おちて居るんだからチと言つ、男に追かけられてキイ〳〵言て
騒ぐところへ路次からお袋が出て來るに吃驚して立止り「阿母さん
お湯かへ。

附、すみ塗られた男

天水桶を覗いて「イヤア塗も塗たり落しも落したりッ邪見に塗る奴
サ湯にでも行てズット元のお
奇麗なお顔にお成遊ばさうか
ナドレ〳〵草紙洗ひと出掛や
せうコレサ〳〵今度は白粉を
持出して左樣いぢめッて無し
サ、見くびりなさんな今度遣
ばもう大丈夫サチ人の顔を硯

だと思つて居るナニ石天窓には打て附たト、ヘッ墨はぬられてもま
た泥をぬられた事のない貌たヨ。

◉花の秘訣——八々に負げぬ法

桐雨道人

春は花と京の四季の初ばなに唄はる、文句ならねど、いさみす、みて勝負するは品川風にも散らされぬ共に來て引く花あそびならんか此遊び元は京より出しと聞けども今は月見花見、日天子月天子、大鳥小鳥色男などの本厄消にて横しまの道に入る横濱流とやら西洋臭き羅紗綿花とやら、無雅な名の附た仕方が流行り、まろ〳〵宜しい私し海岸通りに住みますてふ洋人の片言が其儘題目となりヨドシーめくりにガンの遣取りなど變れば變る世の習ひに從つて其引方も同じからぞ尾が手を入れ堂二が望み親や播て出を掛れば親に對して蹈むの叩〳〵の、忌はしき限りなれども樂み亦其中に在り、赤三本十丹光一〳〵ッ附、からす、雙三本、四三、一二四、手四、ハチケンを手厄として裏菅、紫、四光、總一杯、素十六、八十八勝を出來約とし禁制、獨拂ひの制裁を設け、六十若くは七十の吟味を置き、猶は足らぞば傍を附け、獨三、獨六、獨九、獨十二貫、四一、五二三六、四七、五八、二八、四七、天秤等の出を承知し五三一＝獨六、一二四＝四一、一二三＝獨り三貫等の九々呼聲を暗じ、二貫役は六十四に切り三貫役は五十二、四貫役は四十に切るなどの勘定を覺へ、野桐五貫ぞり、强情三貫ぞり、手四に起なし三光めなし、七十五に拔なし、ドンに引なし、考へる手に出なしなど云へる夫々の格言を守りて、親に掛るは尾が切り堂二に掛るは親が切り尾に掛るは手を詰

て打分れの策を講じ、敵の石高しと見ば見せ出で之をはづし我が石高きときは逃を拂ッて大事を取り、大役は對向にして平均を保たせるなどの掛引を知り、入手、差手、呑ませる、骨ろ、打當ろ、突起して代らせろ、打出させて手轉ばせろ等の妙趣を解し、烏ぬけでも知れそなものよ、両三夜ばいは暗が好い、三本さきの烏の聲、十一二人持ちやなと云へる斬新の洒落をつかひ、一挺下を覗きて下町は火事だと云へば上町はボヤだと答へ、對手の時は三に成度と觸込で人を威し、替り手染め手の時は對買だと偽り、大役の時は故と落膽の色を示して客を誘ひ、手に在るときは喰た〳〵と周章を見せて他を煽動て、恐れて切るも轉ぶらと虚勢を張りて敵に斷念めさせ、捨させる工夫するなど總て偽るを三味線引〳〵と唱へ、十二勝負を一吟味若くは一年と呼び十二吟味を一ヌスと稱するが即ち一定の引方

にして是等を先づ世間有り觸れたる引手とし是より上なるを商賣人又は黒人又は如何樣師ペテン師など、云其掛引も亦一層綿密にして歌牌に一々符牒を附け「やまけふこゐてあさきゆめ」の十二文を用ふるを山がへしと云「や松、ま梅、け櫻、ふ藤」の順序を追ひ、又此符牒を數字に割附「や」の字を聞せて「やけだ出てやれ」が一貫厄「けちな手」「けぶな手」など三貫厄「ふさけた手」四貫厄「こまッた手」五貫厄等の類なれども此上にも微妙の策あり、塲通しは塲の札を讀み「オヤ〳〵松の大塲が」と云ふ聲の中に前條の意味を含せ「爾だ大塲か三太郎」だと洒落ながら續て來る「けもの」を下の相棒が押て食、膝通は札を握し手の置き塲所を上中下三段に分ち猶指通し顔通しなどの秘密を設け、人知ぬ相棒と語り合ひ、其播方にも同樣の秘傳あり、手八は一人の時の苦しがりとし、相棒の有るときは、相棒が揃

へて渡すとき一寸と手先を推し附れば、萬々旨く揃へてあるとの知せとさとり、之を正直らしく切りたる上望まずれど幾度び切るも元に返り、望みたるは小手返し又は環燈がへしと云ふ秘術にて逃げを取ながら元に返す、通し方の掛引に由りて好き手も故と落るとあり悪き手も無理に引くとあり、落るときは好き札を両の端と眞中と都合三個所に配り置き堂二に居る我相棒に向附させ起させるなり、相棒も爾る者なれば望むときには半分の札を傾斜せて其底に椽側を作り椽側を持ちて望むゆへ札の順は初めの儘なり、抜役は之が爲に抜けヨロシイも之が爲に出來、後でば誰某に勝たと云はせ食て遣たと云ふ、食て遣る故に毛物と云ひ之を略して單に「毛」とも云ひ又「物」とも云ふ、出を掛るにも「出」るとは云はず「取持つ」と云ふ取持つのと引くのとは大なる相違にて賓人と賓人と互に勝負するときは「腕

ッと」又は「地を引く」と云ふ、揃ゐるにも最も優しきを素寄せとし素ばかり寄せて烏を播かせ、取りしとき我間に並し札の順を其儘揃へて食ッ附、手四等を播けるもあり、札を切るにも切り上あり切下げあり衣掛けあり、播くにも下底まきなど云ひて我が手の掌の底より出るを賓人の初心とし其外に口傳も多し、詰る所ろ揃へる、切る、播く、望む、落る、引く此六を手段とし、此頭文字を取りソキマノオヒと云ふ事もあり、斯る秘密を一々に抒きては、恐しさの限りにして折角新春を面白く遊ばふと云ふ罪なき素人衆に二の足を踏ませ其興を妨ぐるにひとしければ秘密は是切りとして之よりお敎ゑ申し度きは、斯る如何さまに引掛らぜ、又負を取らぬと云ふ秘傳なり、是にも先づ上下二通りの傳授あり傳授科の高低に由り上策下策を敎ゑ分ると云ふには有らねど、先づ下の策より傳授せんに何でも他人

の揃ひし札へは、間がな隙がな手を入れて、一たびでも我手の入らぬ札は播せぬと云ふが肝腎、扨は疑ぐられたかと思へば氣が咎めて如何樣は出來ぬものなり、此外に又自分が望むと云ふは其望みし札を取り除け、親が播盡したる后まで渡さぬも好し、親手に乘るも好し最初に我に播かれたる札四枚を引繰返し是だけ望むと云ひて場に投出せば意外にも我が次へ幡く積の札が一段上りて我に來り、圖らぬ好き手を得る事もあり、又此傳を防がん爲め親が初より用心してテン場と稱し最初に場へ四枚出すも有り、故にテン場を播く人には氣を許す可からぬ、(因みに云ふ萬更の素徒にて何の譯も知らぬテン場を播くが癖の人あり是れ大に僻事なり) 夫に最一ッ氣の許せぬは我身が毎もく堂二にばかりなる樣なハメに成る事あり、斯るときは誰か我身を食んとする爲では無きかと窃に注意するが好し、又堂二が望みたる者を親で一挺回るも好し、爾は云へ是等は總て下策にして餘り好き手段には非ぬ殊に由ると歌牌屋で賣て居る心得の書に載て居るやも知れぬ、茲に道人が多年の經驗にて發明したる上策と云ふは我陸海軍の如く必す百戰百勝と云ふ保險は附けねと兎に角決して負けぬと云ふ事だけは請合なりと申せば定めし六かしき仕方ならんと察し給ふべけれど、左まで六かしき事に非ぬ、辛抱さへ能く

ば誰にも出來る事なり、トサ是だけ云へばア、分ッた堅く手を〆るのだらうと先を潛る人もあらんが手を〆れば逃も出るし吟味も取られる故に必す負けるなり、是は負ぬ事請合にあらで負ける事請合なり、ア、今度こそは分ッた分ッた大膽にドシ〳〵出るのだろう、イヤ夫は猶は負る方なり、夫では何うする、曰く斯サ、一切花遊びに手を出さねば決して負る氣遣ひなし、皆樣先ア欺されたと思ッて花

を引くのを廢して御覽じろ決して負る事はありません、夫で若し負けたとあれば其時こそは道人が「代理になつて引て呉れるか「イヤ逃を拂はぢに寐て仕舞ひます。

◉滑稽演說 强兵新策——美人軍

愛國居士演說

諸君よ諸君、四千万同胞諸君よ、今や我帝國は淸國に連戰連捷、眞に破竹の勢なるとは、寔に絶喜絶快の至りでありますが、併し月に村雲花に風、和尙に煩惱、人に梅壽で有魔して、連戰連捷武威赫々なるに隨て、更に亦た我を嫉むの國もマ、有るやうですから、チヤン〳〵征伐はヨシ全勝を得て結局するも、更に亦イツ何時他の心得違ひの國から、最后ドン〳〵おツぺケペーと鉄砲を差向けないに限りません、尤も我陸海軍の勇武精鋭なる、假令何國何邦と戰端を開くも、敢て少しも恐れ顫くとは有ませんが、さりとて萬一にも數大强國一時に合併來攻するときは如何でせうか、假令克く之を禦ぎ却くとするも、隨分苦戰せねばなりますまい、左れば今回豚尾國に打勝たからとて、中々油斷はならない、苟も永久に安全に、我帝國の金甌無缺を欲せば、尙層一層も十層も兵備を擴張すると、實に肝要も肝要大肝要ならすや。

サテ之れからが諸君の聞き處、吾輩の洒邊利處で有ます、抑々我陸海軍擴張の事に付きましては、此れ迄あらゆる名相賢臣の御骨折もあり、又貴衆議員諸君の御高論もありまして、上下共々苦心に苦心を重ねた事でありますが、去りなから如何せん、此の擴張論に付きましては、經費てふ腰巾着が有まして、如何にドウコウ思へばと

て、何分先達つものは○式でありますから、何卒して○式の掛、ちん様、而して兵備の整頓する様考へますのが之れ眞の策士の策士たる處であります、若し夫れ金錢を播散せば此く云ふ辨士だッて隨分唐丹等にもおとらぬ色男になれます。

そこで吾輩の考案は、金がかゝらぬして兵隊を損せすして、幾百万の大敵をも容易に打却けるには、紅裙隊一名美人軍なるものを編制するが第一の得策良計だろうと思ひます、請ふ之より其利益を述べませう。

即ち茲に一の女師團を編制して、之れを帝國ホテル數百倍の營所に屯せしめ、十七八歳より二十四五歳止りの美姫を養ひ置き、課程を定めて琴三味線を習はしめ、其餘暇を以て或は裁縫或は織物編物等を爲さしめたらんには、平均一日一人に付き二十錢の潤利ありとせば、而して一師團一万人とせば一師團一日に貳千圓、一月に六万圓、一年七十二万圓の收入が有ます、此位收入があり魔すれば、諸入費を引去つても尚多分の餘金が厶ります之れ實に男兵に比して月瓏であり升。

そしてサテ戰爭と云ふ時には定めて敵は幾十の軍艦に荒くれ男を詰めこみ勇氣堂々とやつてまいりませう、その途端

に此方にては、送りド、遜かなんかで『吹けよ春風開けよ窓を中の黒奴の顔見たや』など、唄ひつ、幾艘の屋形船に美形を乗せて出してごろうじろ、ドコの赤髯軍でも忽ちに、オヤと斗り呆ッ氣に取られて鉄砲を向ける勇氣もなく、オイ「ヘドレケー君」中々日本の唄は面白いじやーないか、幸ひ軍中の徒然だァ、持合せのブランデーでもやらかそうとかなんとかなるに遜ひは有ません、いくら無茶苦茶な屁奈猪古でも、尾を振つて來る犬は打たれん道理ですものを、増して裝ひに裝ひたる美形ですものを、涙迚の蘆は伊勢の濱荻とはいへ美人は美人に見へるに違ひ有麿仙から、中にも拙者の樣な少しく自惚根性のある赤髯は、ドーモ顔に石炭の墨かあつてはいけんとて急に靴刷毛で顔をこするやら、鬚が赤くつては日本人には池ないからとて煙筒の燻を取つて髯を染めたりしてイヤモー大混雜を極める

に違い有ません、そうこうして居る内には先きのブランデーが利いて來ますから、一同大屁々禮氣に屁べッて、前后正体なかりけりと寢て仕舞います。

サアこうなれば占めたもの、此方は此機を見澄まし、潜水器の五十組も出して窃かに敵艦の下に潜り入り處さらはぞコッ〳〵艦底に穴を穿けます、彼奴等はグッスリと寢込んでその醉のさめる時分にはハヤ口の邊りに海水が侵入して、丁度醉醒の水が欲い時分ですから夢中で醉覺のウオーターの甘さは下戸知らぞでゲスなど云ふが此世のお暇乞、末期の水となるなどは實に奇妙奇手列だろうと思ひ升。諸君如何思召す、誠に之れは千古に卓絶する一大妙術だろうと思ひます、但し之れに當てる美形は　良家の處女深窓の令孃では余り勿体ないから、年期明けの娼妓、運薬拍子等を用ひたら相方両爲めな

らんと思ひ升。

嗚呼惜いかな世は澆季、拙者をして代議士に撰出したならば、充分此の迷論を妓場に擔ぎ出さんもを。

（完）

日清滑稽流行歌 大博覽會了

明治廿八年二月十八日印刷
仝　年一月廿五日發刊

編輯兼發行人　大阪市東區淡路町五丁目四十七番屋敷　石橋喜三郎

印刷者　大阪市東區平野町四丁目九十一番屋敷　柏井權三郎

發賣所　大阪市東區平野町心齋橋筋　矢尾弘文堂

仝　大阪市東區淡路町五丁目　石橋南門堂

明治[illegible]年[illegible]月[illegible]日印刷
明治[illegible]年[illegible]月[illegible]日發行

全[illegible]南門[illegible]
大阪市[illegible]丁目
發行[illegible]　[illegible]文堂
[illegible]
印刷者　[illegible]三[illegible]
[illegible]丁目[illegible]
印刷[illegible]　[illegible]堂二[illegible]
[illegible]丁目[illegible]

特64
383

日清滑稽流行歌 大博覧会

国立国会図書館

074396-000-7

特64-383

日清滑稽流行歌大博覧会

松の家　みさを／著

M28

CEI-1648